

中学校における『新古今和歌集』の授業展開の研究

— 教科書掲載和歌の内容分析を通して —

木村 澄子

1. 本稿の目的

本稿は、『上越教育大学 国語研究』第37号掲載の論文である、木村(2022)の「中学校における和歌教材の現状と課題－教科書掲載の『新古今和歌集』入集歌の検討を通して－」(以下、論文Ⅰとする)と対を為す論文である。

論文Ⅰでは、中学校における和歌の学習が抱える課題について、『新古今和歌集』(以下『新古今集』とする)を中心に検討した。その内容をまとめると、次の4点である。1点目は、教科書や教師用指導書に示されている目標や活動が多く、しかもそのほとんどが重視されていることである。2点目は、教科書に掲載されている和歌数が少なく、教科書や教師用指導書に掲げられている目標を達成できないことである。3点目は配当時数が少なく、目標や活動のすべてを取り上げることが困難だということである。4点目は、教師用指導書の内容と教科書の目標・活動との間にずれがあることである。

本稿では、上記4点の課題の解消を目指し、さらに、中高連携の観点を踏まえながら対応策を検討したい。

中高連携の観点を踏まえるのは、平成17年度の高等学校教育課程実施状況調査において、古典分野が国語の中でも飛び抜けて通過率が低く、しかも前回調査と比べて「通過率が低下し、無解答の生徒が増加するという結果になっている」との報告に¹対する中学校の責任も重く、中高連携は急務であると考えためである。さらに、高等学校に関しては、令和4年度スタートの新しい教育課程に対して、下記の梶川(2020)のようにその内容を危惧する意見も見られる²。

それは現行のものとは大きく異なり、「主体的・対話的で深い学び」を標榜し、「知識重視型」から「課題解決型」の学習への転換であるとされる。したがって、同じ教材を扱うにしても、従来とは違った授業の展開が考えられなければならない。

しかし、それに対しては文学教材を学ぶ機会が少なくなるということを中心に、すでに多くの人たちが批判的な発言をしている。もちろん、その点も重要なのだが、新学習指導要領の求める授業は難易度が高過ぎるという点にも目を向けなければならない。「これらを立案・計画した人々には、決められた目標に向かって進める能力を持ち、それを可能にする環境にある高校生だけしか見えていないのではないか」(朝比奈なを『ルポ 教育困難校』朝日新書・2019)とする批判は、教育困難校で教鞭を執った経験のある人のものだけに、説得力がある。新指導要領の求める授業を実施に移すため、多くの教員が日々苦悶することになるだろう

が、筆者は、苦闘空しく、そうした学習に適応できない高校生が大量に生み出されるのではないかと懸念している。ところが、多くの批判によって頓挫した大学入学共通テストの記述式問題導入とは異なり、それについてはなぜか、社会的な盛り上がりが見られない。このままでは、それが撤回もしくは軌道修正される可能性はない、と見なければなるまい。

このように、学力の低下が危惧される状況を考えると、中学校において今までよりも高等学校の学習内容との連携を意識した学習に取り組み、高等学校に進学した生徒が、「習ったことがある。」または、少なくとも「聞いたことがある気がする。」と思えるような学習を行うことができれば、高校生の学習意欲低下を防ぐ一端となり得るのではないかと考える。

2. 高等学校における和歌学習の目標及び内容

2.1. 学習指導要領上の古典の扱い

中央教育審議会答申では、「(我が国の言語文化を)継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成する」とし、縦のつながりを意識した指導を求めている³。その指導を実践するために、まず高等学校の学習指導要領の記載内容を確認することとした。なお、平成30年告示の高等学校学習指導要領から、それまでの「国語総合」に代わって「現代の国語」と「言語文化」が、いずれも共通必修科目として新設された⁴。学習指導要領解説によると、このうち「言語文化」は、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目である⁵。この「言語文化」に関する内容を確認した結果、次の4点が明らかになった。1点目は、中学校と高等学校の学習指導要領の繋がりについてである⁶。2点目は、中学校学習指導要領ではやや曖昧であった、「古典の世界に親しむ」「歴史的・文化的背景」が示す具体的な内容についてである⁷。3点目は、中学校での学習内容が、高等学校でどのように深まっていくのかについてである⁸。そして、いくつかの事項や領域に「本歌取り」「見立て」等、中学校ではほとんど取り扱わない表現技法があることから、4点目として、高等学校での学習内容の広がりが明らかになった⁹。

2.2. 教科書に掲げられている学習目標・学習内容

2.1でも見たとおり、「言語文化」は我が国の言語文化への理解を深める科目であるため、学習指導要領に掲げられている内容のほとんどが古典の学習に関わるものである。その点が、一部分しか古典に関しての特記がない中学校学習指導要領と大きく異なる。そこで、高等学校の教科書の目標と活動については大まかな内容把握を行うこととし、論文Ⅰの中学校の調査のように学習指導要領に対応する内容とそれ以外とに分けることはしなかった。なお、本研究の時点では「言語文化」の教科書は入手不可であったため、「国語総合」の教科書を調査対象とした。調査結果をまとめたのが、次の表1である。

表1 高等学校「国語総合」教科書の学習目標・学習活動

	音読	古典の一節 を引用する	表現技法の 理解	句切れ・リ ズムの把握	心情 理解	情景 理解	歌集の 特徴把握	本歌と の比較	文法的内 容の理解	その他
明治書院	※1 ○		○	○	○		○		○	
数研出版	※2 高・新		改・高	○	新	高		改・高		改・高:現代語訳 新:調べ学習
大修館書店	精・新			精・新	○	○	精・国		精	新:創作活動(現代語訳) 国:調べ学習
第一学習社	標 (朗読)	○ (感想文)	○	○	標		標	高		標:創作活動(短歌)
東京書籍	国・精	精 (感想文)	※3 (○)	国・精	国・精	国・精	国			国:三夕歌の比較
桐原書店			○		○					三夕歌の比較
筑摩書房	○ 暗唱も		○	○				○		現代語訳
三省堂	○ 高:暗唱も	○ 高(紹介文) 明(歌物語創作)	高	○	○	○	高			
教育出版		新 (鑑賞文)	○	○	新	○		国	国	三夕歌の比較

※1 ○は該当の表記があることを示すが、本表では特に、その教科書出版社の教科書で、今回調査したものすべてに該当の掲載があることを示す。

※2 高・新等は教科書の略称。補注参照¹⁰。

※3 (○)は、明記はないが関連の記載が見られることを示す。他表も同じ。

各社の重なりが最も多いのは、「表現技法（教科書によっては「修辞技法」）の理解」と「句切れ・リズムの把握」「心情理解」であり、次に多いのが「音読」である。「表現技法の理解」と「音読」については、それぞれ学習指導要領の〔知識及び技能〕(1)に、「オ 本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること¹¹⁾。」「内容の取扱い」(3)に「イ 文章を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れること¹²⁾。」とある。また、論文Ⅰで述べたとおり、詩歌の「音読」と「句切れ・リズムの把握」は密接に関わっている。そして、「心情理解」は学習指導要領〔思考力、判断力、表現力等〕の「B書くこと」にある、「イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。」という内容に¹³⁾関わる項目である。つまり、この4項目はいずれも学習指導要領の内容を踏まえたものであり、各社の取り扱いが多いのは当然である。また、「言語文化」が「小学校及び中学校国語科と密接に関連し、その内容を発展させ、総合的な言語能力を育成する科目」であると位置付けられていると¹⁴⁾おり、この4項目はすべて、論文Ⅰで見た中学校の教科書で掲載が多かった学習内容と重なっている。

3. 高等学校教科書掲載和歌の実際

「国語総合」教科書掲載の『新古今集』和歌と作者をまとめたのが次の表2である。各社が最も多く掲載している和歌は、藤原家隆の「志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月」である。この歌について、例えば東京書籍は教師用指導書で、

本歌取りの歌。「さ夜更くるままに汀や凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」(『後拾遺和歌集』冬・四一九・快覚法師)の歌を本歌とする。本歌の世界を上句に

表2 高等学校「国語総合」教科書掲載の『新古今集』和歌及び作者

教科書掲載和歌	※ 明	数	大	一	東	桐	筑	三	教
見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけん	○	○	○		○	○		○	
薄く濃き野への緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え	○								
風通ふ寝覚めの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢	○		○	○	○		○	○	
たれかまた花櫛に思ひ出でんわれも昔の人となりなば	○								
見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮	○			○	○	○			
きりぎりす鳴くや霜夜のさ籬に衣片敷きひとりかも寝ん	○								
志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月	○	○	○	○	○	○	○		○
玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする	○	○	○		○	○	○	○	
風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな	○								
春の夜の夢の浮橋とだえてし降に別る横雲の空			○	○		○	○		○
むかし思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山郭公			○	○	○	○			
心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ沢の秋の夕暮			○	○	○				
寂しさはその色としもなかりけり横立つ山の秋の夕暮				○	○	○	○	○	○
山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水					○	○			
わが恋は松を時雨の染めかねて真葛が原に風さわぐなり					○				
故郷は浅茅が末になり果てて月に残れる人の面影					○				
駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮									○
人住まぬ不破の関屋の板箱荒れにしのはただ秋の風						○			○
うちしめりあやめぞかをる時鳥鳴くや五月の雨の夕暮							○		
思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る							○	○	
年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山							○	○	○
橘のにはまふあたりのうたた寝は夢も昔の袖の香ぞする									○
ほのぼのと春こそ空に來にけらし天の香具山霞たなびく									○
忘れてはうち嘆かる夕べかなわれのみ知りて過ぐる月日を									○

※明・数 等は出版社の略記。次ページ参照。複数の教科書に異なる歌を掲載している場合は掲載数最多の1冊を選択。

〈出版社名及び教科書発行年〉

明：明治書院 H29
 数：数研出版『改訂版 国語総合 古典編 H29
 大：大修館書店『国語総合 古典編』H25
 一：第一学習社『新訂 国語総合 古典編』高等学校国語総合』共に H25
 東：東京書籍『国語総合 古典編』H29
 桐：桐原書店 H25
 筑：筑摩書房 H25
 三：三省堂『国語総合 古典編 改訂版』H29
 教：教育出版『国語総合』H25

	明	数	大	一	東	桐	筑	三	教
後鳥羽上皇	○	○	○		○	○		○	○
宮内卿	○								
藤原俊成	○	○	○	○	○	○	○	○	
藤原俊成女	○		○	○	○		○	○	○
藤原定家	○	○	○	○	○	○	○	○	○
藤原良経	○			○	○		○	○	
藤原家隆	○	○	○	○	○	○	○		○
式子内親王	○	○	○	○	○	○	○	○	○
西行法師	○	○	○	○	○	○	○	○	○
寂蓮法師			○	○	○	○	○	○	○
慈円				○					

まとめ、更に月も凍って昇ってきたと見立てたところに、いっそう冷え透った美の世界がある。有明の月を配することで絵画的な要素も加わり、「凄み」のある歌となっている。

と解説する¹⁵。また、明治書院は「本歌取り」の歌であることに加えて、「月が凍ったような冷たい牙え切った光を放つのであり、それは冬の月の印象を捉えたものであるが、その原因を、凍ってゆく波間から出てくるから、という論理で上の句と結びつけた。本歌の生かし方が巧みである。」と解説し、さらにこの歌が新古今時代に盛んに行われた「題詠」の歌であり、「湖上冬月」という制約の多い四字題に「本歌取り」という武器で立ち向かった。」とも説明する¹⁶。2社の解説から、この和歌には「本歌取り」「絵画的」「題詠」など『新古今集』のいくつかの特徴が見られることがわかる。

作者についてはどのような傾向が見られるであろうか。表2の作者一覧を見ると、和歌以上に各社の重なりが顕著であることが分かる。9社すべてに選ばれているのは、式子内親王と西行法師である。式子内親王は新古今時代を代表する女流歌人の一人であり、女性としては最も多くの和歌が『新古今集』に入集している。そして、『新古今集』入集歌数最多の歌人が西行法師である。次に教科書に多く選ばれているのは、藤原俊成・藤原定家・藤原家隆であり、8社が採択している。次は、後鳥羽上皇・藤原俊成女・寂蓮法師であり、7社に選ばれている。後鳥羽上皇は『新古今集』の下命者であり、歌集の完成に並々ならぬ思いと時間を注いだ。藤原定家と藤原家隆は『新古今集』の撰者である。寂蓮法師は歌集の完成の前に亡くなったが、後鳥羽院から選ばれた撰者の一人であった。藤原俊成は定家の父であり、後鳥羽院の和歌の師であり、「新古今歌人たちの指導的役割を果たした」人物であるため¹⁷、『新古今集』への影響は大きい。藤原俊成女は、藤原俊成の孫だったが後に養女となった人物で、「後鳥羽院のもとに女房として出仕し、「後鳥羽院歌壇における女流の中心メンバーとなり、当代随一の歌人として活躍した」人物である¹⁸。

このように見てくると、多くの教科書出版社に選ばれている作者は皆、『新古今集』及び新古今時代と深く関わりのある人物であることが分かる。

4. 中学校と高等学校の和歌指導の比較

4.1. 単元のねらい及び教材選定の理由

この章では、論文Ⅰでも取り上げた「単元のねらい」や「教材提出の意図」、「教材選定の理由」における和歌学習の内容を確認した上で、中高連携の視点から、重点指導事項を明らかにすることを試みる。

今回の調査で対象としたのは、東京書籍・明治書院・三省堂の国語総合古典編の教師用指導書である。参考のために、論文Ⅰに掲載した光村図書及び東京書籍の中学3年生用国語の教師用指導書の内容を表3として再掲する。

表3 中学校及び高等学校における教師用指導書掲載の和歌学習のねらい

		リズム・ 調べを 味わう	和歌に 親しむ	古人のもの の見方・感じ 方を捉える	歌集の 特徴を 理解する	和歌史の 流れをつ かむ	和歌の文学 史的な意味 を知る	表現の豊か さ・表現技 法の理解
中 学	光村図書	○		(○)				○
	東京書籍	○		○	(○)			○
高 校	東京書籍			○			(○)	
	明治書院	○	○	○		○		○
	三省堂	○	○	(○)	○		○	○

表3から、「古人のものの見方・感じ方を捉える」「リズム・調べを味わう」「表現の豊かさ・表現技法の理解」の3項目が、中学校と高校の両方に見られることがわかる。このことから、中と高で共通して重視している和歌学習の重点事項であると言える。

「和歌史の流れをつかむ」と「和歌の文学史的な意味を知る」は、中学校の教科書では取り扱いがない項目であることから、高校で学ぶ内容であり、中・高での住み分けが現れている項目と言える。

4.2. 単元のねらいと学習目標及び学習活動の関連性

次に、上記で確認した、和歌学習の重点事項と思われる「古人のものの見方・感じ方を捉える」「リズム・調べを味わう」「表現の豊かさ・表現技法の理解」の3項目が、教科書ではどのように表現されているかを確認する。中学校と高校の教科書掲載の目標や活動の文言を比較すると、例えば明治書院の「句切れに注意しながら、それぞれの和歌を音読してみよう。」という文言が、「リズム・調べを味わう」というねらいと対になっているなど、高校は一つの目標や活動に一つのねらいが対応しているものが多い。また、高校には、東京書籍の「句切れや倒置法に注意しながらリズムカルに音読できるよう練習する。」のように、どこに着目して取り組む学習内容かを具体的に示している目標や活動も多い。教師用指導書に、歌集ごとの目標設定があるのも特徴

の一つである。その結果、高校ではそれぞれの歌集や一つ一つの学習内容に対して、より深く学ぶことができる。それに対して中学校は、掲げられている目標は二つと、一見少ないように見えるが、そのうちの一つは、「作者の心情や描かれた情景を読み取り、表現の効果などについて考える。」という目標が「古人のものの見方・感じ方を捉える」と「表現の豊かさ・表現技法の理解」という二つのねらいを含んでいるように、一つの目標に複数のねらいが対応している。しかも、「リズム・調べを味わう」に関しては「句切れ」と明記せずに、「声に出して読み、言葉の響きやリズムを楽しむ。」「和歌のリズムに注意して、繰り返し声に出して読んでみよう。」という曖昧な書き方をしている。つまり、中学校では教科書を使う側が学習内容を細分化し、さらに、曖昧な表現については「単元のねらい」や「教材提出の意図」、「教材選定の理由」と比較して、学習内容を明確にする必要があると考えられる。

4.3. 学習目標及び学習活動と教科書掲載和歌との整合性

論文Ⅰで述べたとおり、「単元のねらい」「教材提出の意図」等の「古人のものの見方・感じ方を捉える」には「心情理解」「情景理解」「状況理解（「歴史的背景の把握」も含む）」が、「リズム・調べを味わう」には「音読」「句切れの把握」が含まれている。また、中学校の学習内容は、「歴史的背景の把握」「音読」「その世界に親しむ」「古典の一節を引用する」「表現技法の理解」「句切れ・リズムの把握」「心情理解」「情景理解」「歌集の比較（歌集の特徴把握）」の9項目である。これらを整理し、教科書掲載和歌と学習目標及び学習活動との整合性を調査した結果、中学校の教科書掲載和歌と教師用指導書の解説だけでは、特に「歴史的背景の把握」を含む「状況理解」と、「歌集の比較」について、十分なねらいの達成は望めないことがわかった。（論文Ⅰ参照）

ここでは、高校の教科書出版社1社（三省堂）の教科書に掲載されている和歌と、その和歌に関する教師用指導書の解説とを照合し、目標や活動との整合性があるかを確認する。項目として立てたのは、論文Ⅰで中学校2社（光村図書・東京書籍）について照合した際に立てた「心情理解」「情景理解」「状況理解（「歴史的背景の把握」も含む）」「句切れ・リズムの把握」「表現の豊かさ・表現技法の理解」「歌集の比較（歌集の特徴把握）」の6項目である。この6項目は、高校の和歌指導においても取り上げられている項目である。調査対象を三省堂の教科書にしたのは、今回調査した東京書籍・明治書院・三省堂の教科書の中では、目標や内容に中学校のものとの重なりが最も多かったためである。教師用指導書の解説内容と、6項目の学習内容への対応の有無をまとめたのが、表4である。なお、和歌の表記は三省堂の『高等学校国語総合古典編〔改訂版〕』に従った。

先ほども述べたように、中学校の教科書掲載和歌と教師用指導書の解説だけでは、十分なねらいの達成が望めない「歴史的背景の把握」を含む「状況理解」と、「歌集の比較」について、高等学校の記載内容は十分に対応していることがわかる。このうちの「状況理解」については、詞書の有無も大きく影響している。中学校には掲載がないが、高校の教科書には詞書も掲載されており、和歌が詠まれた状況の一端を知ることができるのである。

表4 三省堂教科書掲載和歌の学習内容への対応の有無

	心情理解	情景理解	状況理解 (歴史的背 景の把握)	句切れ・リ ズムの把握	表現の豊かさ ・表現技法の 理解	歌集の比較 (歌集の 特徴把握)
見わたせば山もとかすむ水無瀬 川夕べは秋となに思ひけん	○	○	○	○ 三句切れ	○	
風通ふ寝覚めの袖の花の香にか をる枕の春の夜の夢		○		句切れなし	○	○
寂しさはその色としもなかりけり 楨立つ山の秋の夕暮	○	○	○	○ 三句切れ	○	○
駒とめて袖うちはらふ陰もなし 佐野のわたりの雪の夕暮		○	○	○ 三句切れ	○	○
年たけてまた越ゆべしと思ひき や命なりけりさやの中山	○	○	○	○ 三・四句切れ	○	
玉の緒よ絶えなば絶えねながら へば忍ぶることの弱もぞする	○		○	○ 二句切れ	○	
思ひあまりそなたの空をながむ れば霞を分けて春雨ぞ降る	○	○		句切れなし	○	○
人住まぬ不破の関屋の板廂荒れ にしのはただ秋の風	○	○	○	○ 三句切れ	○	

中学校と高校とで、教科書や教師用指導書に記載されている情報量に違いがあるのは、中学校が和歌学習の入門期で、広く浅く学ぶ場だからであろう。それに対して高校は、その世界に深く踏み込む場であるため、「歴史的背景」や「表現の豊かさ」、そこから生じる「歌集の特徴」について窺い知ることができる和歌の掲載や解説が増えるのだと考える。

5. 中学校における和歌指導の課題と方策

ここまで見てきた高等学校の和歌学習の内容を中学校に生かし、論文Ⅰで述べた、配当数時間の少なさ、学習内容の多さといった問題の解消を目指して提案したいのが、「本歌取り」の学習を授業に取り入れることである。その理由を述べるために、以下にいくつかの根拠となる資料を示す。(下線は稿者による。)

元々、光村図書の教師用指導書には「本歌取り」に関する記載がこれまで幾度も見られる。平成14年以降の教師用指導書では、『(「新古今和歌集」は)「本歌取り」の技法によって、古今的世界への回帰を図りながら、荒廃零落した貴族社会の現実を超越する、象徴的・観念的世界を作り上げ、独自の歌風を切り開いている。』と説明する。しかし、平成5年・9年発行の教科書に、「花さそふ比良の山風吹きにけりこぎ行く舟の跡見ゆるまで」「桐の葉も踏み分けがたくなりけりかならず人を待つとなけれ

ど]「駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮」の最大3首掲載されていた本歌取りの歌は教科書から次々と消え、平成18年発行教科書の、宮内卿の「花さそふ……」を最後に現時点では掲載が見られなくなる。それにもかかわらず、『古典指導の方法』（令和3年は『指導に役立つ古典のポイント』）では、平成24年から現在に至るまで授業の展開例の一つとして「現代版本歌取りに挑戦する」という活動を提案している¹⁹。

また、東京書籍発行の高校用教科書の教師用指導書は、「内容の違いについては、各歌どれも対象が異なっており、内容に違いが出るのが当然であるのだから各集の比較のしようがないというのが、生徒（あるいは教師も）の率直な感想であろう。」と述べ、次のような解決策を示す²⁰。

そこで、たとえば「比喩」「反実仮想」「本歌取り」などの修辞技巧（「否定法」なども考えに入れてよいかもしれない）を手がかりとして、生徒の思考を促してみたい。（中略）新古今集に多く使われる本歌取りは、本歌の世界を読者に想起させることを前提に、新たな世界観を提示しようという意識の表れともいえる。このように、古今集、新古今集で多用される修辞技巧が、一首の世界を深いものにしており、読者とある意味一体となって、鑑賞にいざなうような効果をもたらしていると言ってよい。万葉集歌の場合は、それが少ない分、素直な詠みぶり、あるいは力強さにもつながる要素を持っている。

同書には、次のような解説もある²¹。

『新古今和歌集』のもう一つの大きな特徴が、本歌取り・本説取りである。「夕べは秋」で瞬時に「秋は夕暮れ」を思い起こすように、当時の人々の間では『枕草子』が知的財産として共有されていたわけである。代々の勅撰集、『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』更に『白氏文集』など、血肉になるまで歌人たちに浸透した共有の古典データベースがあり、本集の和歌は決定的にそれに依存している。それはいわば「文学から文学を作る」方法であり、古歌や詩文の魅力が歌の背景にあってその歌に奥行きと膨らみを与える効果を持つ。

明治書院は少し違う視点から「本歌取り」と『新古今集』の関係を解説する²²。

第四期は建保四（一二一六）年十二月頃までで、いったんは完成したはずの集に対し、改訂作業が続けられた時期である。かつてない勅撰和歌集を作り上げようとする、後鳥羽院の執念と行動力が如実にかがわれる。それは、古代の理想社会を今に再生しようとする情熱である。古歌や物語を踏まえる本歌取りの技法は、表現におけるその端的な表れといえよう。

渡部（2014）も、歌集編纂の時代背景を踏まえて、「『新古今和歌集』は失われていこ

うとする古代文化を復興しようとする、ルネッサンス的な機運の横溢した勅撰集」と表現する²³。また、明治書院は「共有の古典ベース」について次のように述べる²⁴。

本歌取り技法を用いた和歌作品を正確に理解するには、その本歌を知悉していることが不可欠である。本歌取り作品は、その作品を味わう資格を問うているといっても過言ではない。その点で、本歌取りは崩壊しようとしている平安貴族社会を生きる人々の、新たなる紐帯の証ともなったのである。

本歌取りを用いた和歌を理解しようとする側の難しさだけではなく、詠む側の歌人たちの苦勞について、上條(1994)から窺い知ることができる²⁵。上條は、平安後期の歌人達が、たとえば「詠み残したるふしもなくつづけもらせる詞も見えず。いかにしてかは末の世の人の珍しきさまにもとりなすべき」(『俊頼髓脳』)と嘆き、「堆積した古歌群の重圧のなかで、いかに清新な歌を詠むかに腐心していた」ことに触れ、そのような中で「本歌取技法が発達して行った」のは、「古歌堆積の重圧を逆手に取って死中に活を求める、当代の必然的詠風だったのである。」と述べる。この「本歌取り」という表現技法成立の背景から、『新古今集』の歌人たちが置かれていた状況を知ることができる。

6. 終わりに

本稿では、『新古今集』を中心に、高等学校と中学校における和歌の学習内容の比較を行い、中学校における和歌の学習が抱える課題の解消法について検討した。検討の結果、「本歌取り」の学習を行うことが、課題の解消に有効なものではないかと考え、提案することとした。「本歌取り」を中学校の授業で扱うことの具体的なメリットとして、次の3点が挙げられる。1点目は、新古今時代の歌人が身につけていた「共有の古典データベース」の一端に触れられることである。それは、「古人のものの見方・感じ方の把握」の助けとなるばかりでなく、中学校の教科書掲載和歌だけではねらいの達成が十分ではなかった「状況理解(歴史的背景の把握)」にも繋げられる内容である。2点目は、『新古今集』の特徴的な表現技法を扱うことで、「状況理解」同様、ねらいの達成が困難であった「歌集の特徴の把握」が可能になることである。本歌が『万葉集』や『古今集』である歌を扱えば、これらの時代のものの見方・感じ方や歌集の特徴の一端にも触れられる可能性があり、「歌集の比較」に繋がるなど、一首から学べる内容は多い。また、高校では『新古今集』といえば「本歌取り」というほど中心的な扱いとなり、教科書には本歌取り・本説取りの和歌が必ず掲載されている。それを踏まえて、3点目として、中高連携の一助となり得る点を挙げたい。

以上の検討結果を踏まえて、次稿では具体的な「本歌取り」の和歌を示し、それらを活用した授業提案を行いたい。

補注

本論文掲載和歌の表記は、光村図書・東京書籍・三省堂他に倣い、『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。

- 1) 国立教育政策研究所（2007 公表）「平成 17 年度高等学校教育課程実施状況調査 教科・科目別分析と改善点（国語・国語総合）」p.3
- 2) 梶川信行（2020）「教科書の中の万葉歌－新学習指導要領に対応した教材へ－」『語文』第百六十七輯 pp.26-27
- 3) 中央教育審議会（2016）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省 p.129
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧日 2021.12.21）
- 4) 文部科学省（2018）『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）』pp.20-23
- 5) 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領解説編国語』東洋館出版社 p.109
- 6) 注 4) 前掲書 pp.36-37・注 5) 前掲書 pp.109-111
- 7) 注 5) 前掲書 p.118
- 8) 注 6) 同上資料
- 9) 注 4) 前掲書 p.36・37
- 10) 数研出版 改：『改訂版 国語総合 古典編』（平成 29 年発行）／高：『高等学校 国語総合』（平成 25 年発行）／
 新：『新編 国語総合』（平成 29 年発行）／大修館書店 精：『精選 国語総合』（平成 25 年発行）／新：『新編 国語総合 改訂版』（平成 29 年発行）・『新編 国語総合』（平成 25 年発行）／国：『国語総合 古典編』（平成 23・25 年発行）／第一学習社 高：『高等学校 新訂国語総合 古典編』・『高等学校国語総合』（共に平成 25 年発行）／標：『高等学校 標準国語総合』（平成 25 年発行）／東京書籍 国：『国語総合 古典編』（平成 25・29 年発行）／精：『精選国語総合』（平成 25 年発行）／三省堂 高：『高等学校国語総合古典編〔改訂版〕』（平成 29 年発行）『精選国語総合』（平成 25 年発行）／明：『明解 国語総合』（平成 25 年発行）／教育出版 新：『新編国語総合 言葉の世界へ』（平成 25 年発行）／国：『国語総合』（平成 25 年発行）
- 11) 注 4) 前掲書 p.36
- 12) 注 4) 前掲書 p.37
- 13) 注 4) 前掲書 p.37
- 14) 注 5) 前掲書 p.109
- 15) 東京書籍（2017）『国語総合（古典編）教師用指導書』p.458
- 16) 明治書院（2017）『新精選国語総合指導書古典編Ⅱ』pp.62-64
- 17) 注 15) 前掲書 p.46
- 18) 注 16) 前掲書 p.167
- 19) 光村図書『古典指導の方法』（2012）p.198，『古典指導の方法』（2016）p.172，『指導に役立つ古典のポイント』（2021）p.71
- 20) 注 15) 前掲書 p.463
- 21) 注 15) 前掲書 p.466
- 22) 明治書院（2017）『新精選国語総合指導書古典編Ⅱ 指導書』p.48
- 23) 渡部泰明（2014）「歌枕の世界」『和歌文学の世界』島内裕子・渡部泰明 放送大学教育振興会 pp.11-22

(28)

24) 注 22) 前掲書 p.82

25) 上條彰次 (1994) 「藤原俊成・定家の歌論」『和歌文学講座 新古今集』第六卷 勉誠社
pp.337-361

(新潟県立直江津中等教育学校教諭 令和3年度修了生)